

北朝鮮には核兵器を保有する権利がある。8割以上の国連加盟国と国交があり、東アジアでは、日韓を除く全ての国が国交を結ぶ、堂々たる主権国家だ。

主権国家が核兵器を保有することは、本来、他国がどうこう言う問題ではないが、それが虐殺や飢餓、強制労働によって支えられ、経済援助を引出す恐喝の道具になっていることが最大の問題だ。

また、社会主義国にもかかわらず、分配は不公平で、公正平等とは程遠い階級社会でもある。さらに、その階級ですらある日突然剥奪され、無慈悲にその命まで奪われる。カストロやホーチミンには遠く及ばず、フセインやカダフィですら、この国の首領より人道的だ。冷戦後も世界に類を見ない恐怖政治が驚異的に機能する稀有な国だが、帝国の介入と歴史のいたずらによって、唯一国体を維持する方法がこれだったのかもしれない。

しかし、三代目首領、金正恩の目には、その悪夢から脱却しようとする意思がみなぎっている。その方法は、労働党への段階的な大政奉還だ。

経済特区の導入は、どうあがいても自由という混乱を生み出し、独裁を脅かすライバルの出現を生む。その先に彼の目論む小中国的、一党独裁体制の未来がある。爆発的経済成長は、間違いなく国民の不満を一掃するだろう。

しかし、三代にわたる虐殺の恩讐が消えてなくなることはない。

彼は身を捨てて労働党への大政奉還を図

民族の未来

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

り、その使命を果たした時、亡命を決断する。そのときまさに民族の英雄となるのかもしれない。

私がびっくりしたのは、日本の左寄りTV番組が、トランプ憎し!と、軍事演習中止や在韓米軍縮小に異論を唱えていることだ。普段、自国の安全保障すら「戦争への道」と断罪する輩が、極東の安全保障のために在韓米軍は必要だとたまうのである。「朝鮮のための朝鮮半島の非核化」とは、果たして米国が望む「北の大量破壊兵器の排除」なのか?必要なのは、同時に米軍の傘も排除され、対等の立場で同族同士が歩み寄り、平和条約を結ぶことだ。

帝国が干渉するから、民族自らの歴史を育めない。同じ民族同士、当事者が決めるべき問題である。争うのも歩み寄るのも民族の矜持だが、今や自己責任という歴史を背負って、歩み寄るしかないのだから。

主体性を欠く歴史に拘泥し、反日を利用して国益を図るのももう終わりにしよう。お互い助けが必要なきには、素直に頭を下げるべきだ。

さて、今やアイドルの將軍様も、時がたてば処刑の対象になるだろう。

恨の文化は決して金一族を許さない。だが、それでも將軍の目には、身を捨てて国家の未来を見据える意思を感じる。

彼の身体からは、その叡智と勇気のオーラが放たれているからだ。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中